

ダンマパダアッタカター語義解釈と

他法句經類との関連について

高 橋 宏 文

ダンマパダアッタカター（以下 Dh.p. A.）は周知の通り、スリランカ上座部に伝持されてきたダンマパダ（以下 Dh.p.）の註釈書である。従来このテキストの研究は、因縁物語への文学的興味からのアプローチが主流であり、各偈文の語義解釈の部分は付随的なものとして扱われ体系的な研究はほとんどなされていない状態である。確かにそれは一部派による偏向した解釈かもしれないが、Dh.p. の各偈を解釈するうえでこれは最も重要な資料の一つであることは言うまでもなく、また他の法句經類との関連を調べる際にも貴重な示唆を与えてくれるものである。今回は Dh.p. 第6偈、第41偈に対する語義解釈上、ならびに用語上の相互関係が見受けられる点について論じようと思う。

まず第6偈であるが、この中ではパーダ B にある Yamā-mase という動詞が問題になる。この語は以前からその意味するところについてしばしば論及されてきた。動詞の形は一

人称複數為他言命令形であるが、語根は「努力する、自制する」の意の √yam であるのか、あるいはヤマ（死神）の名動詞型であるのかがはっきりしていないのである。この点について K・R・ノーマン博士は両方の意味の語呂合わせであろうと解釈している。⁽¹⁾ところが、ウダーナヴァルガ（以下 U.）の対応箇所には udyamamāhe とあり、ud + √yam によって述べられているのであって、そこにヤマの觀念は見受けられない。⁽²⁾また漢訳法句經⁽³⁾も同様であり仏數梵語法句經では jayamāha で、これもやはり自製の意であろうと思われる。⁽⁴⁾しかし Dh.p. A. の語義解釈では次のようになってゐる。この解釈は二つの部分に分かれ、前半では Yamā-mase に対して uparamāma, nassāma, satatāṃ maccusantīkaṃ gacchāma、ヤマの解釈を示しているのに対し、後半では bhandaññaṃ vuddhiyā vāyamāma、√vi + a + √yam と解釈している。⁽⁵⁾一方、この偈は他のパーリ經典中には Vinaya, Majjhima,

Jataka. 456 Theraḡaṡha (Thaḡ)に見られ、それらに対する註釈を調べるに、四つとも Dh. A. の前半部分を共有しており、かつ Vin. A., MN. A., JAt. A. はその部分のみ、すなわち「死神の面前に行くべし」の解釈しかなされていない。それに対し Thaḡ. A. は前半部分に加えて、Dh. A. と同様の vāyamāma という解釈を、Dh. A. とは全く異なる表現で補足している。ところで、この偈に付けられた因縁物語は JAt. A., Vin. A. が Dh. A. と同様のものであり、Thaḡ. A. は、この偈がサビヤ長老に帰せられてゐる関係からか別の物語が語られてゐる。つまり Vin. A., JAt. A. は、Dh. A. と同じ物語を語つたうえで「ヤマ」の解釈しか述べていないのである。このことから私は次のように考える。すなわち、この偈が作られた時点でのオリジナルな意味はともかく、少くともスリランカ上座部においては Yamamase に対して「ヤマ」

の解釈が伝統的になされてゐたのではないか。—— もっともそれが所謂シンハラソースまで遡れるかについては資料的裏付けはないが——そして Dh. A. 作成の時点で註釈者は、ブッダゴサや JAt. A. の作者が意識していなかった「努力、自制」の解釈を、他の法句経類(主に北方系のもの)からの影響を受けて、—— おそらくそうした意味をも持たせるべきだという解釈が南方でも有力になってきてゐたのであろう——伝統的解釈をまず踏襲して述べたうえで、この偈に添えられ

た因縁物語を考慮しつつ後半部分を作成したのであろう。その後、Thaḡ. A. の作者とされるダンマパーラは Dh. A. の解釈を意識しつつ、かつ Dh. A. とは異なる自らの因縁物語を考慮して Thaḡ. A. の後半部分を作成したのであろうと思われるのである。

次に第41偈であるが、これは Uv. およびガンダーラ語法句経⁽³⁾(GDhp.)にも相当偈が見られる。それらを比較した際、Dh. の chuddho に対して Uv. では Sunyo、GDhp. では tuchu となつており、また nirattha に対しては Uv. は nirastam、GDhp. は nirattha となつてゐる。パーリー の chuddha という語に対して諸註釈は apaviddha (apa + vyadha)「棄つられた」、あるいは chaḡḡia (√kṣip)「投げ捨てられた」という解釈を施しているが、語源的研究が先学の諸博士によって既になされてゐる。それによると通常言われている Skt. の語根 ksbh から考えるのは困難であるとされており、J・ブラフ博士は語源を古ヒンディー語に求めている。そこには「棄てられた」という意味の語と類似の語に「無用な」という意味があり、これが GDhp. の tuchu すなわち tuccho に通ずるという指摘をしてゐる。そしてまた Dh. の chuddho を Uv. GDhp. では nirastam, nirattha と受け、Dh. の nirattho を sunyo, tuchu と受けて、偈全体の意味に極端な違いが出ないようになっていると考えられる。ところで第41偈に対す

る Dh.p. A. の註釈は次のようになってゐる。

Tattha 'aciraṃ vatā' ti bhikkhu na cirass'eva ayaṃ kāyo
paṭhaviṇ adhiessati imissa pakāyā sayanena sayiāya pa-
ṭhaviyā upari sayissati, 'Chuddho' ti apaviddho apagatavināṇa-
tāya tuccho hutvā sessati ti dasseti, yatha kim? 'nirathāṃ va
kalīṅgarāṃ' nirupakarāṃ nirathakāṃ kaṭṭhakaṇḍaṇḍaṃ (以下略)。

つまり、斜体で記述した言い換えの部分で、GDhp. との一致が認められるのである。フランク博士はこのことも指摘しているが、偶然にしては一致しすぎるとして次のような両方向への仮説を立てている。すなわち、① GDhp. の方が古い形を表しており、Dhp. が韻律的な形に直した際、古い語句が註釈の中に保存された。② Dh.p. の形の方が古く、GDhp. もしくはその系統の法句経が、註釈を参照しつつ韻律にあまたらわれずに再構成した、というのである。しかし他のパリー註釈文献においては adhi に対して upari¹ sessati に対して sayissati という言い換えは一般的に見られ、また apeta に対して apagata という表現も少なからず見受けられる。そして tuccho と chuddho の言い換えとは必ずしも言えない。従って GDhp. の系統の法句経を意識して Dh.p. A. が作られたとは考えにくい。もっとも、だからといって短絡的に Dh.p. A. から GDhp. の系統の法句経が作成されたとは言えないが、少なくともその接点を Dh.p. A. に求めることができないのではないか。そしてその際、フランク博士の指摘にもあるように、chuddho の意味と tuccho の意味との混同から tuccho を採用し今日見られるような形になったのではないか、そして Uv. vii chuddho に匹敵する語をもたないために tuccho の解釈の影響を受け、より仏数的色彩の濃い sunya の語を使ったのではないかと考える。フランク博士は、果してパリーの註釈が北西インドまで知られていたかは疑問であるとしているが、森祖道博士による、三蔵の古註の一部はインド本土で成立したという説^②によれば、GDhp. の系統の法句経に影響を与えた可能性は否定しきれない。もっとも、これには明確な資料の裏付けが存在せず、飽くまでも仮説の域を出るものではないが、Dhp. A. の語義解釈と他の法句経との関連を示唆する貴重な一例と言えよう。

ないが、少なくともその接点を Dh.p. A. に求めることができ
るのではないか。そしてその際、フランク博士の指摘にもある
ように、chuddho の意味と tuccho の意味との混同から tuccho
を採用し今日見られるような形になったのではないか、そして
Uv. vii chuddho に匹敵する語をもたないために tuccho
の解釈の影響を受け、より仏数的色彩の濃い sunya の語を使
ったのではないかと考える。フランク博士は、果してパリーの
註釈が北西インドまで知られていたかは疑問であるとしている
が、森祖道博士による、三蔵の古註の一部はインド本土で
成立したという説^②によれば、GDhp. の系統の法句経に影響を
与えた可能性は否定しきれない。もっとも、これには明確な
資料の裏付けが存在せず、飽くまでも仮説の域を出るもの
ではないが、Dhp. A. の語義解釈と他の法句経との関連を示唆
する貴重な一例と言えよう。

- 1 K. R. Norman: The Elder's Verses I, PTS, pp. 174-175.
- 2 Uv. 14. 8. ③ 法句経双要品 ④ 大正 4 562a。
- 4 Shukla: Buddhist Hybrid Skt. Dh.p. 254 (など) Roth 版は 255)。⑤ Dh.p. A. I (H. C. Norman 訳) p. 65, 22 行目 Abha vā 以下を後半に移動。⑥ Vin. A. vol V. p. 1151, MN. A. Vol. IV. p. 205, Jataka Vol. III. p. 487, Thag. A. Vol. II, pp. 114-115. ⑦ Uv. I. 35. 8 J. Brough: Gandhārī Dh.p. 第 153 偈を参照。⑧ commentary 参照。⑨ Dh.p. A. I. p. 320 f.
- 10 森祖道著『パリー仏教註釈文献の研究』山喜房仏書林 1984. p. 214 以下。

(東北大学大学院)